

関東圏初の高大連携協定の締結
『東洋大学グローバルコースの設置』

学校法人 麴町学園
麴町学園女子高等学校

『麴町学園女子高等学校』



麴町学園 校舎

皇居を臨む千代田区麴町の閑静な文教地区に麴町学園女子高等学校はあります。

「聡明・端正」の校訓のもと、豊かな人生を自らデザインできる自立した女性の育成をめざして設立された同学園は、令和7年に創立120周年を迎える歴史ある伝統校です。

多様化する社会に対応できる「みらい型学力」を身につけることを教育目標とし、各教科で身につける知識・技能である「見える学力」と、教科を横断した資質・能力である「見えない学力」を育てるカリキュラムを展開しています。同校は、教育の柱である「学力の保証」

「心の保証」「進路の保証」の実現に向けた施策の一つとして、平成28年に東洋大学と学校間教育連携協定を締結し、翌29年には同大学への進学を前提とする「東洋大学グローバルコース」を新設しました。

包括的な高大連携と連携大学への進学を前提とした進学コースの設置により、これまで付属校か系列校に限られていた内部推薦入学の門戸を開き、多くの生徒の進学希望を叶えています。

◆高大連携への取組の設置背景

同学園は、社会情勢の変化に伴う入学者の低迷により、平成24年に高校の生徒募集を一時停止し、完全中高一貫校としていた時期がありました。

高校入試の再開を模索する中、平成27年に着任した前校長山本三郎氏が、関西の前任校で高大連携を成功させた実績を有していたことにより、その成功体験をもとに関東圏初の高大連携に向けたプロジェクトが動き始めます。

◆新たな英語学習法の導入

高大連携に向けて、まず取り組んだのが英語の指導内容の刷新でした。令和2年度から始まる大学入学共通テス

トを見据え、当時、文部科学省の「英語教育に関する有識者会議」委員であった安河内哲也氏が提唱する英語4技能をバランス良く習得する取組を学校全体に取り入れ、「学ぶ英語」から「使える英語」へシフトチェンジを図りました。

この新たな学習法「アクティブイングリッシュ」の導入により、英検2級取得率が飛躍的に向上し、この躍進が教育界の注目を集めることとなり、全国の中高等学校、学習塾、大学などの関係者が視察に訪れるようになりました。このことが契機となり、東洋大学との学校間教育連携が実現し、高校入試の再開へ道が開かれていくことになりました。

◆東洋大学と教育連携へ

同校では「アクティブイングリッシュ」や「グローバルプログラム」といった英語教育や海外研修、短期留学などグローバル人材の育成に力を入れており、同校での学びを持続・発展させることのできる大学として、文部科学省の「スーパーグローバル大学（SGU）創成支援」採択校に注目をしていました。候補に挙げたのは、平成26年に同事業に採択された東洋大学でした。東洋大学は、連携以前から同校で進学希望者が最も多い大学でもあり、高校3年間と大学4年間の7年間を通して人材育成を図れるのではないかと考えたからです。

粘り強いアプローチの結果、「アクティブイングリッシュ」をはじめとした同校独自の取組が評価され、平成28年5月に関東圏では初の学校間教育連携協定を締結する運びとなりました。

◆東洋大学グローバルコースの設置

東洋大学との連携により「東洋大学グローバルコース」を設置することとなりましたが、関東圏では前例のない取組であったため、同校で教職員の合意を得るまでの1年は大変だったと振り返ります。

コース名からも吸収合併のイメージが付いて回り、連携そのものに疑問や反対意見をもつ教職員がほとんどでした。また、あまたある大学の中で、なぜ東洋大学なのかを理解してもらう必要がありました。

受験生側のニーズを把握するために中学校を訪問した際も、本当に進学できるのか信用を得ることができず、説得に苦労したといえます。

最終的には、動き出さなければ分からないことも多々あったため、関西で高大連携の成功実績のある前校長のリーダーシップの下、覚悟を決めてスタートすることとなりました。

一方で、当時の大学入試改革は一般選抜の枠が絞られ、先行きに対する不透明感が広がっていた時期でした。しかし、大学卒業後の自分を想像し、高大7年間を通じた学びを進めることができる本コースは、設置3年目以降は定

員を超える生徒数を確保することができるとなりました。

◆高大連携講座

連携を進めるうえで特に配慮したのは従来型の指定校推薦制度の弱点を克服することでした。これまでの指定校推薦制度の多くは、大学との交流がほとんどなく、大学のことを知る機会が多くありませんでした。同コースでは、入学後のミスマッチをなくすために、学習の一環として大学や学部学科を理解する機会を様々に設けています。

連携講座は、高校1年・2年合同で行い、2年間で同大学のすべての学部を扱う形式で実施されます。キャンパス訪問や学部説明会、在学生交流会などを通して進路を考えるきっかけを作り、各学部の教員による出張講義を受けて研究レポートの作成を行うなど、早期に進学先を意識し、大学を知ってもらうためのプログラムを大学と連携して充実させています。

また、生徒だけではなく保護者も一緒に大学を見学するプログラムや卒業生の話を聞くプログラムも実施しています。

◆進学先の決定まで

同コースは、高校の評定平均や英検の取得級などの推薦基準を満たすことで、原則として全員が東洋大学へ進学することが可能なため、生徒は大学受験の勉強にとらわれることなく、じつ

くりと自分と向き合いながら学びを進めることができます。

一方で、学部学科ごとに1〜5名と受け入れ枠が設けられているため、校内の選考で枠から漏れてしまうと、志望する学部学科で学ぶことができなくなってしまう。

教員は枠の中で順位付けを行い、生徒に対して第1志望から第3志望までの複数パターンの検討と提示を行います。生徒1人の志望が変わることでも、枠の中での順位が大きく変動するため、こまめに希望をとりながら、進学基準を超えることができるように学力を引き上げる努力をしています。特に3年生になると生徒はセンシティブになるため、密な面談と生徒に寄り添った言葉かけを心がけています。



授業の様子

◆高大連携校の拡大

同校には高校からの入学者と中学からの内部進学者である6年一貫コース

の生徒がおり、高校からの入学者(定員80名)は全員が「東洋大学グローバルコース」に在籍し、6年一貫コースの生徒(定員120名)は、高校で「GAコース(選抜文系コース)」「SAコース(選抜理系コース)」「Aコース(文系・理系コース)」のいずれかを選択します。

「東洋大学グローバルコース」は高校からの入学者を対象としているため、6年一貫コースの生徒にも同じように進路保証ができないかと考えていたところ、「アクティブイングリッシュ」やキャリア教育「みらい科」など独自の取組が評価され、東洋大学以外の大学からも連携の声がかかるようになりました。

平成29年には東京女子大学及び共立女子大学、平成31年には女子栄養大学及び成城大学、令和3年には日本女子大学と連携協定を締結しました。

◆今後の展望

同コースにおける東洋大学への進学者は令和5年度の4期生までは増加傾向にありましたが、令和6年度は減少し、進学率も62%に下降しており、この進学率をどう捉えるのか、その分析が必要と考えています。

また、同学園は中高一貫教育をベースとしていることから、中高6年の間に変化する生徒のニーズや進路の多様化に対応できる形も考えていかなければなりません。

6年一貫コースでは、中学2年から

「サイエンス探究クラス」を、高校でも「SAコース(選抜理系コース)」を設けていますが、現在の連携校に理系の学部は一つしかないため、検討の声が挙がっています。一方で、連携校を増やすことについては、全ての大学に生徒を送り出すことが難しいという問題が生じ、連携校との信頼関係の構築が難しくなるため様々な場合を想定して検討を続けています。

同校では、連携校の一部の学部学科と連携を締結しているケースが多く、そこでのやり取りを通して、当該大学との信頼関係を構築した結果、複数学部学科との連携拡大へとつながっています。このため、まずは現在の連携校に継続して生徒を送り続けることで信頼関係を維持し、その信頼関係を基に、連携学部の拡充を検討していきたいと考えています。

そのためには、求められる学力と質を有する生徒を輩出し続ける必要があります。同校の強みである独自の教育プログラムに磨きをかけ、生徒の進学希望を叶えていきたいと考えています。

〈取材後記〉

高大連携の成功の背景には、創立以来の伝統ある女子教育と革新的な教育プログラムの融合による独自の取組がありました。学びを通して未来への選択肢を広げてほしいとの思いが伝わる取材となりました。

【取材 私学経営情報センター】